

在特会の論理（6）

—— ワールドカップがきっかけとなったF氏の場合 ——

樋口 直人

1. 問題の所在

マンガ『嫌韓流』の第1巻の冒頭は、2002年のワールドカップから始まっている。筆者は当初これを読んだ時、なぜサッカーが取り上げられているのか理解できなかった。同時に、在特会調査に着手するに際して東アジアの地政学的構造と排外主義の関連をめぐる仮説を考えたとき、1つ解けない謎があった。植民地清算や歴史認識をめぐる問題、拉致問題といったトピックは、朝鮮半島や中国に対する憎悪を生み出し、それが在日外国人への憎悪に転換されていく。——こうした問題に若年層がどれほど関心を持つのか、政治に関心がない若者が果たしてこれで在特会的な言説に誘引されるのか、この仮説では説明できない。それを補うのが、ワールドカップというきっかけであり、これについては調査の過程で知り合った複数の人に指摘された。すなわち、ワールドカップでの「韓国のラブプレイ」が韓国に対する嫌悪感を生み出し、それが入り口となって「嫌韓」のレパートリーを受け入れていく——『嫌韓流』がそうした構成になっているかの如く。これは確かに現実に即した仮説であり、日常的な関心を東アジア地政学に接続していくきっかけになるだろう。

ここでいう東アジア地政学とは、冷戦構造の継続と植民地主義の清算問題の継続という2つの要素からなる（樋口 2011）。冷戦末期に韓国や台湾で民主化が進んだものの、38度線と台湾海峡をはさんだ軍事的敵対関係は、欧州での冷戦終了後も変化しなかった。自衛隊にとっての仮想敵は、ソ連から中国・北朝鮮へと移行している。日本の経済的衰退と中国の経済的・軍事的な台頭、北朝鮮の慢性的危機と核開発といった要因が相俟って、東アジアの経済的プレゼンスの高まりとは裏腹に政治的不安定さは解消されないまま残っている。それに加えて日本と韓国・中国の間には、歴史教科書、従軍慰安婦、靖国神社参拝といった植民地清算・歴史認識をめぐる問題が外交上の重要課題となる状況が続いている。

しかも、在日外国人の3分の2近くは東アジア籍である。近隣諸国との緊張関係が生じた際、それが在日

コリアンや在日中国人へと投影され、敵意を向けられる。日本型ゼノフォビアは、こうした東アジアの地政学的状況に大きく規定されていることが特徴となるだろう。外国人参政権に対する反対論をみても、「与那国や対馬が危ない」などと現実の投票行動として起こりえないことが喧伝されるのは、それを増幅する地政学的状況ゆえのことである。より集住度が高く「危ない」存在なはずであるにもかかわらず、地政学的要因の影響を受けない在日ブラジル人は、参政権論議の標的とされない。2000年代になって使用頻度が高まった「反日」というキーワードは（上丸 2011）、近隣諸国、在日外国人（コリアン、中国人）に対して適用されており、両者は連続した存在とみなされる。

このように、「外国」と「外国人」を連続して扱う思考を生み出す導入として、ワールドカップは機能したようである。では具体的にどのようにして「導入」になったのか。2011年6月11日にF氏（30代男性）に対して実施した聞き取りからみていこう。

2. 政治に対する関心

まあないことはないですけども、だけどそんなにね、社会運動やろうとか政治運動やろうというほどではないです。投票ぐらいはしてました。そこまで厳密には行ってないですけどね。さぼることもありましたし。

（投票先は自民党かという）必ずしもそうじゃないですよ。まあ自民党が多かったとは思いますが。私は印象に残っているのは、細川政権誕生した時に選挙行けなかったんですね。あれが結構印象に残ってね。で、その後だれに入れていたか、自民党が確かに多かったとは思いますが、当時は反自民にも結構期待はしてました。無党派です。

（それが変化したのは）2002年くらいですよ。ワールドカップです。小泉政権というのもあったと思うんです。靖国神社に参拝すると。当時靖国神社って私全然知らなかったんですけども、それに対して何でいちいち外国が文句言ってこなきゃなんねえんだと、そう思ってますね、それで「いやこれはすごい人がで

てきたな」と。それからですね、意識して本当に国のことと思っているのかを考えて投票するようになったのは。

(それからは) 自民党ですけど、私自身は西村真悟先生。今、西村塾、西村真悟先生のところの塾にも入りましたし。政治家としては西村真悟、あとはまあ他の人についてはヘンですけど、そこに近い、考え方が近いところですよ。

3. 外国人との接点

(在日コリアンは) 地元にはいないんですけど、隣町には朝鮮学校があるみたいですね。そこ、どれだけ勢力でかいのかってわからないんですけど。そっちの隣町のほうには何かその、左翼の活動家としても有名なのが、これは後からわかったみたいなんですけど、いるみたいなんです。何かと在特会のイベントなんかやったときに、何とかっていう左翼の連中が相手側のところに賛同しているというのがありまして。(当時は) 全然知りませんでした。

(近所や学校にも) いないですね。在日っていたかもしれないけど、彼ら自身が在日と名乗ってはいなかったし、だいたいみんな日本人だと思いますけど。キムチだって食べたのは大学に入ってからじゃないかな。在日って存在を意識したことはないですね。

(外国人問題に対する関心は) まったくなかったです。で、普通に外国人ていうか、会社ですね、いますし。特に私、理系なんで外国人の研究者と一緒にやりますし。その中で英語で会話するってのも普通にやりますし。外国人に対してそこまで侵略とか排斥だとか考えたこともない。

(中国や韓国についても) 知らなかったです。この運動っていうのは、結局知ったというのが、そういう現状を知ったというのがきっかけになっているんで。なんていうのかな、そこまで関心も今までずっとなかったし。韓国とか中国といったって、はっきりいってどういう国だったかよくわからなかったんですよ。ただ中国人とか韓国人って留学生という形で来ていて、ちょっと文化が違うな、くらいだったんですよ。で、だけどなんか彼らが——我々が教わっている、なんていうかな要するにアジアに対する負の考え方ね、日本は悪いことした悪いことしたって——その割にはあいつらなんか妙に日本のこと好きだし。何でだろうなとずっと思っていました。

4. ワールドカップと拉致から「在日特権」へ

《ワールドカップというきっかけ》

(東アジアに眼を向けるきっかけは) ワールドカッ

プですね。ワールドカップの年にだいたい集約されていると思うんですよ。拉致の問題もそうですし。あとワールドカップで実際になんかマスコミがおかしいぞ、という。インターネットでのぞいてみたらやっぱりそうだった。自分と同じ考え方がこんだけいたって。ワールドカップに対する韓国の報道です。

やっぱ一番なんか象徴的だったのが、最初日本で単独開催だったんですね。韓国で一緒になるうって話になって、準備できているのかなと思ったら、全然その準備もできてなくて。いきなりなんか共同開催って、ぎりぎり向こうも間に合ってよかったなと思ったら、あいつらファールはいっぱいあるわ。じゃあ共催だっていうことだから、互いに応援合っているのかというのとんでもない。そういうのが段々明らかになってきて、やっぱおかしいなと。やっぱりサッカーというのは結構大きかったんですよ、影響というか。今回こういう運動やるという意味で。

(そう思ったのは) ワールドカップが終わってからですね。それでインターネットで調べて、情報が入ってきたっていう、たまたまそういうところ見たっていう、こちらから積極的に調べたっていうのがあって。それでおかしいということがずっとわかって、納得するような答えが出てきて、それでああ在日特権なんだと、いうところに行きました。

(韓国がおかしいということか) まあそうですね。おかしいということ、それはうすうす感じてましたし。それで検証するっていう、そういうことをやっていた人たちもいて。で、やっぱその何か審判買収しているんじゃないかと。大体わかるんですよ。韓国のラフプレイっていうのは、もう非常に眼に余るものがある。他の国ってのもんじゃないですよ、ラフプレイしているんですから、普通に。今のファウルだろうというのをとってくれないとか。

(そうした話をする人は) 周りにはいないですよ。ワールドカップの話題で何か韓国おかしいぞっていうのは出てきましたけど、「そうだよ」くらいで。自分で調べて、本もいくらか——それ以降ですけど——出始めて。『嫌韓流』も出てきて。

(それだけでなく、教育勅語を) 暗記してますよ。それでも靖国神社にお参りするようになってからだから、拉致の事件が起こってからですね。小泉純一郎の「俺は行くぞ」、とそれで確かに私も靖国神社ってほとんど意識してなかったんですよ。いつも靖国神社近く通るとですね、右翼の街宣車があって、殺すだなんだって書いてあって、なんでこう品のない奴らが集まってきているのかと思っていたんですよ。ところが小泉さんが何が何でもお参りするとやって、外国とい

うかね、特定アジアの人たちが嘯み付いてきて、何でという形でそのあたりですよ。それで実際に自分の眼で見てこようと。自分で行って見て、その頃からですね、『ゴーマニズム宣言』なんかを読むようになったのは。

《拉致の衝撃》

そこからマスコミってやっぱり本当のこと報道してくれねえじゃないかって。どうも在日特権みたいなことがありそうだとかって。韓国に対する批判の目とか、そこだと思うんですよ。その中で拉致の問題が出てきて、やっぱりそうかあいつら拉致してたんだと。そのくらいからですよ、特定アジアという言葉が出てきたのは。何か知らないけど特定アジアで、アジアに対するなんつうの、戦争犯罪とかってというのは必ず特定アジアなんですよ。それで何となくこういうのがつながってきて。(ネット上の情報ということか) そうですそうです。あのとき2ちゃんねるはすでに。私は一部の結果しか知りませんけれども。(書き込みは) 全然、全然そんなことは。書くこともないし、それから書くことも全然なかったし、本当に。在特会に入ってから、割とバンバン書くっていうか、しゃべるっていうか、それからです。

(衝撃が強かったのは) やっぱ拉致ですよ。確かにね、そのあれが結構でかかったのは、今まで拉致なんかないよって意見が結局あったという意見を圧倒していたんです。それががらっと変わりましたよね。(拉致は) あったとは思いましたけども、ただその、表立っていえるほど証拠もないし、まあちょっと弱いかと思ってたんですよ。それがね、向こうのトップが認めたんだから、ああやっぱあったのか、と思えましたよ。

(韓国は無関係なのではないか) だけど、同じ民族だって私は思ってたから。今になってみればね、北と南でやっぱり仲悪そうだっていうのはわかったけれども、同じ朝鮮人じゃないかって。

《「在日特権」の発見》

(なぜ朝鮮半島から在日に眼を向けたのか) 同じ民族ですから。私もね、民族性とか何だかってはつきりとはわかりませんよ。だけどね、結局そんなに簡単に人の生活とか人の文化、習慣って変えられるものじゃないでしょ。そこを考えてみたら、在日もそんなに一朝朝鮮人という点で変わらねえだろうと思いますけど。ただ彼らも少しずつは変わってきていますよね。彼ら自身も日本にしかいられないってことがだんだんわかってきたというか、そういう文化・習慣という

のをなじんできていますよね。

(そのとき在日特権という言葉はなかったのではないか) そうですね。あ、でもそのとき言っていた人いたみたいなんです。そのときから在日特権ということ。ただそのときには全然気づかなかったですね。

6. 救う会から在特会へ

《救う会への加入》

きっかけとしては拉致被害者救出運動のとき、少しずつ運動し始めていって、それで行動するってことに広がっていって。最初に出たのがあれだと思うんです。何か街頭でリボンを配るっていう。ただそれだけの運動なんですけどね。それにたまたま参加して、日本全国こういう組織があるってというのがそこでわかってきて。で、「地元じゃないの？」って調べたら救う会がある、それでこういう形でやりたいんでお願いしますと。いって受け入れてくれて。いつぐらいかっていうと、在特会できる直前くらい。集会とかっていうのは。

行動ということっていうと、私はデモ行進とかなんとかっていうことっていうと、5年以上かかっているんですよ。(リボン配るのも) 2006年とか2007年とかそんなものですから。そこまでに4年は少なくともかかった。それまではネット見て本を読んで、それくらいでしたよね。まあ周り見ても(そういう人が) いなかったというのがあります。デモ行進というのは、私はあまり見たこともないしやったこともないし、在特会入ってからですよ。周りでデモ行進やっている人がいる。じゃあそれで出てみようかと。

(実際に行動するのは) 簡単といえば簡単だし、簡単じゃないといえば簡単じゃないですけども。ただやっぱり、署名運動とかってというのは別にそんなにハードル高いことでもないと思うんですよ。拉致被害者を救出しようという、当たり前のことを言っているだけです。それで拉致の問題というのも認識されているし。言えばすぐに分かってくれるだろう。そんなに特別に躊躇するようなことはないと思うんです。

(参加した理由は) なんでしょうね…。それで集会とかにも結構行くようになったんですよ。聞いているんですけども。いろいろこういう運動があるってことを少しずつ知っていって。これもたまたまインターネットで調べたのか、チラシっていうのかビラっていうかですね、集会なんかで配られる。ああいうので知ったのかももう定かでないですけど。

損得勘定じゃないですよ。もうやらなきゃ。たとえば拉致の問題にしたって結局わかったのが、これだけ拉致被害者というか特定失踪者もひっくるめて言

うと、多くの人が北朝鮮に連れて行かれているっていう現状があって。それで自分も被害者になるかもしれないよ、と。そういう・・・たまたま今自分が日本にいられるのは偶然だったかもしれないな、とわかってですね、そうしたらやっぱり損得勘定じゃなくて、これはやらないと、と思いましたよね。別に警察に頼って警察が全部やってくれるのならやることはないと思うんですけど、警察っていったって市民の協力がなければ捜査もできないわけですから。

《在特会へ》

その頃に在特会というところも知ったし、いろいろなブログとかも出始めてきて。(活動したのは) 救う会の方がちょっと早くくらいです。これはもう、インターネットでこういう組織ができそうだっていうのが、リンクたどっていくと何かそういう動きがあるよ、というのを知って、ああこういう組織なんだと。それで在特会の発足集会、500人くらいの集会に行って、ああこういうのがあるのかと思ってそこで入会した。

(当時桜井氏のブログなどは) 全然読んでいなかったです。(初めて在特会を知って) そのときやっぱりすごい印象的だったのは、無年金訴訟です。何で税金払っていないやつに、いや年金払っていないやつに保障しなきゃなんねえんだって。在特会ができるきっかけというのが無年金訴訟。桜井さんが特に言っていたのはですね、在日の無年金訴訟、在日の敗訴になったんですけど、あれに何で日本人が支援しに来るんだと。それで反対の運動ってあるのか、ということらしいんですよ。どこ探してもない。ないんだったら自分でやるしかないと思ってやったって。

(拉致と在日の) 根幹は一緒ですよ。主権、国家主権という問題。これがずっとおろそかになってきた。自分でも気づかないうちに国家主権といったものをまったく意識せずずっと過ごしてきて、気がついてみたらこれだけやられているんだ、拉致被害、やられない放題やられて。いつの間にかその、就職における在日枠というのも一部企業ではあるらしい。で、何か知らないけど在日が集団で押しかけて行って、わーわーわめきたてて、そういうことをやっているとか。

(入会した) 最初はそう(一会員) ですね。その後運営募集という話があったんで、じゃあやりますよと。そこからですね。少しずつこっちの運動に積極的に関わってくるというのは。(救う会についても) 明日も横田さんらが呼びかけて、全国一斉で署名活動をやるべく呼びかけてくれというので、ちょっとそれに賛同してですね、私も一応やります。在特会も最初それほど表に出て行くというスタイルではなくて、少し

ずつ勢力拡大していこうというスタンスでやってましたけども。民主党政権が誕生しそうだっていう、そういうところになって表に出るようになったんですね。

私はそのあたりからですね、集会にも出るし××さんのデモ行進とかにも行くようにしていたんです。最初はそんなに私もそういうつもりはなかったんですけども、出始めてそういうやり方もあるんだと思って。

《維新政党・新風への加入》

デモ行進とか、表に立って街宣をやるとなると躊躇することになるとは思いますけど。マイク渡されてしゃべれというから(ためらいはなくなった)。ちょうどその頃新風——維新政党新風というのにも入りました。在特会と同じくらいの時期に。街宣とかというのにも出ると。それでちょうどたまたまですね、北京オリンピックありましたよね。そういう時期だったんで、そうするとやっぱ支那中共の大気汚染の問題とか、あるいは核実験の問題も段々出始めてきましたし、そこから入っていったんです。それで少しずつ慣れていったんだと思いますね、人前でしゃべれることは。政治のこととかいうのは、原稿があればしゃべれますけど、それがなければちょっとしゃべれなかった。

最初はちょっと恥ずかしいとか、ありましたけれども、ただ主張していることも別にそんなに過激なことではなかったですよ。××さんがやっているのを見ると。首相は靖国神社に参拝しろって。そんな当たり前のことだから、別に言ったところで・・・。

私としては在特会も新風もその時は同じだと。それは政治運動とやるのかと市民運動をやるのかという差であって、目的としているところはだいたい同じであって。それはいろいろなところでやっていこうと思いついて。

で、やっていったら何か新風のほうが、民族差別を許さないという声明を出しちゃって。あれ以来、党の勢力が落ちちゃったんです。在特会名指しで。そういう感じですよ、あの時は。代表というか魚谷さんが、その時ですね、なぜそういうことをやったのかということの説明しましたが、在特会の活動というのは新風と一緒にだと思われると困ると。イメージが悪くなる。我々はあくまで政治運動としてやっていた、政党としてやっていて票を得たいからやるんだと。在特会みたいなのは困ると。だから、やるんだったら在特会と新風は別でやってくれと。でもそれをやったがために、新風は落ちちゃったんです。在特会というのは、少しずつですけど勢力を今伸ばしつつある。明暗の差

がはっきりわかりましたよね。その時に。

動画の再生数でいうと、新風が一番トップなんですよ。我々の業界では、2007年だけかな、参議院選挙、その時も新風の瀬戸さんたちが朝鮮総連の前で街宣やって、最後なんか信濃町歩き回ったとか。あの動画が20万アクセスあって、あれが一番やっぱ歴代トップ、我々なんぼやっても5万6万が最高なんですよね。圧倒的にそっちのほうが最初よかったです。その路線でずっとやってれば党勢拡大できたのに、それをやめちゃったんですよ。そういう教訓とかっていうのもあって、最初是在特会も我々が今「きれいごと保守」だといって馬鹿にしているような、そういう路線を歩むっていう選択肢もあったんですよ、最初は。それがそこと決別できた。まあ、ある意味新風がそういうことを、自爆してくれたんで、こっちは見ていてこれやっちゃいけないんだなと学ぶことができた、いい例だったと思いますよ。ただ私、新風(を)嫌いでもないんで、党籍は残してます。

7. 在特会での活動

《活動の手応え》

やっぱ一番面白かったのはあれですね、河野談話白紙撤回しようという運動ですね。あの署名をですね、まあやると。とにかく敵にダメージを与えるんだっていう、そういうスタンスですね。これはやっぱり重要だなと思って。それで××さんたちも見ている、在特会もそこに合流してきて、この流れいいんじゃないかとそのときは思いました。その頃はやっぱり手探りでしたよね。あのときは、何やっていいのかよくわからないというか。

結局そのとき、今のスタイルというんですかね、こうすればいいんじゃないかというのが見えてきたのが、蕨市のカルデロン一家の問題。あれで入国管理局のほうにも抗議活動に行ったし、蕨市でもデモ行進やったし、あのあたりからこうすればいいんじゃないかっていうのがちょっとわかってきたような感じがしましたよね。要するに敵——左翼に対してどうすればダメージがあるのかっていう。そのダメージを作るためにどうすればいいのか、と。こっちは今、たとえば今日の反原発っていうのをやりましたよね、向こうが。そのときに黙っているのがいいのか、出て行く方がいいのか。どちらかという、そういうところに出て行ってやった方がいいだろう、という。時間の許す限りそういうところに行った方がいいだろうと。

(当時は) どうすればいいか私自身もよくわからなかった。とりあえずデモ行進もやる、集会もやる、その頃は結局やってもなかなか成果っていうんですか

ね、会員数伸びるといふそういうところには、なかなかどり着かなかったです。やはり会員数が目標を持って近いうちにとにかく1000人超えるように努力しましょう、2000人超えるようにと、そういう形で少しずつやってきたんですけど。あの時ですね、カルデロン問題が起きてそこに乗り込んでいったときに一気に伸びて、ああこうすればみんなみてくれるんだと、そういうことがわかってきた。

(カルデロン一家について) 基本的に問題は一緒で、国家主権という問題と、今の不法滞在を認めると第2第3の在日作っちゃう、そういうことだと私はそう思ってます。結局在日の問題も、私は全然知らなかったんですけど、結局は密入国というのを暗に認めちゃって、それが在日問題にここまで広がってしまった。だからそれは不法滞在という問題、不法入国という問題は、これきっちりやらないと。あんまり移民を受け入れるということにも私は反対ですけど、せめてね、正規に入ってくる人間だけにしてくれと。そう考えるとやっぱり不法滞在というのは絶対にやらないと、思っていましたし。

あの時不法滞在の問題という、左翼のジャーナリストたちはそれは資本主義の構造の問題だとか、それでなんか落ち着けようとしてましたよね。でも、あのときはっきりわかったんですよね。我々が不法滞在の問題ってことをやったときに、会社の経営者が我々に対して反発するんじゃないかと、左翼が反発してきて、今まで労働者の権利を守れとかって言っていた人間が反発してきたってのはどういうことなのかと思って、結局そこに利権という問題が左翼の問題としてあったんだと。まあそういうところが暴いていけたというのも1つの大きな成果だと思う。それで、多くの人たちはそこを気がついた、そういうきっかけを作れた。

だからあれ、何気なくというかね、これは大きな問題だと思って我々真剣にやりましたけども、成果が出ると思ってやったわけじゃないけれども、結果的に相手の痛いところをつくことができたんだと。要は相手の痛いところをついていけば、相手も嫌がるし、嫌がってカウンターかけてきたら、それでこちら側も目覚めてくる。そういうことがようやくわかってきて。それで運動論というか、その時どうしていけば我々の目標というのをね、とりあえずそのときは会員数を増やすという大きな目標がありましたんで、そういうところに結び付けていく。あと動画を使ってとにかく拡散していこうと。

その年ですよね。あのときは最後に勸進橋児童公園という一番大きなイベントがあって、あれが本当に一気に増えたんですよ。あれ、誰が見ても朝鮮学校のや

っていることはおかしいだろうと、思えるようなきつかけをうまく作ってくれたんですね。あれでいたい、そこから先は我々にとって舵取りが難しくなっていましたけれども、でも基本的にあの路線というのですかね、敵の嫌がることをやっていたら自ずとこちら側の賛同者も増えていくという。勢力伸ばせるし。ちょっと今勢力伸ばすということよりも、地道にやっていくということ、そっちのほうにちょっと重点を置かなければならないというのはありますけれども。だいたいそれで運動の方向性、ようやく見えてきたと。

あれ(勸進橋事件)で、共産党がずっと国会議員も含めてですね、一緒にやっていたのが、共産党が逃げましたからね。あれで。だからあれは結構でかかったんですよ。

《真の敵としての左翼》

結局我々ね、在日朝鮮人を敵に据えてるけれども、大部分の在日ってそれほど敵だという認識はないですよ。根本的な問題はそれを支援する日本人なんです。そこが一番問題だと思いますよ。在日朝鮮人に対してどう思っているかと思ったら、大部分の在日朝鮮人はだいたい日本人に味方じゃないかと思うんですよ。彼らも彼らなりに日本で生活していこうという意識はあるでしょうし、民団にしる朝鮮総連にしる、彼ら自身がそんなに快く思っていない部分というのは多々あると思うんですよ。

やっぱ実際会社の中でも在日朝鮮人っていますし。彼らがどう思っているのかっていうことも、だいたい話は聞いていますし。学生の頃かなり大変だったと。暴力事件なんかいろいろやるんですけども、なんか学校同士の抗争があったらそこに参加しなければならぬ。参加しないと先輩からいじめられるし、教師からいじめられるし。本当に半殺しの目にあう。先生が怖いから暴力に参加するって、そういうこと普通にやっていたらいいんですよ。

彼らなりに日本に溶け込みたいし、やっぱり在日というものもあるし。まあ彼らは彼らなりに悩んでいるんだなあと思いますけども。じゃあこっちのほうとして、悩まなくていい方法っていうのはありますよと。そんな中途半端な在日というのをやめて、外国人なら外国人なりに、日本人になりたいというのなら日本人になるというのもいいかもしれませんが、ちょっとそれも怖いと最近思うようになりました。

社会運動という——いろいろと研究されていると思いますけれども——我々ね、偶然の産物というのがいろいろとあると思うんですよ。ただ、爆発させてそ

れで終わりというね、そういう運動にはしたくないな。やるんだったらきちんと目的持って、その目的達成する、それに向かってきちんとやろうと。で、あくまで在特会って桜井さんが特に言ってますけれども、本当に在日特権がなくなったら我々の会をつぶすよ、そのためにやりますよと。非常に潔いというね。それでそのためにやらないことというのは、だいたい普通ならわかるよね、その常識にもとづいてやりますよと。非常に単純だと思いますよ。成功したか成功しなかったかというね、ちょっと今のところまだ入管特例法というところに全然手つけられていないわけですから、今の段階では目的は達成していないわけですから。まあでも、それに近づいてはいるのかなと思います。

(重要なのは南北朝鮮、在日、左翼のうち)全部ですけれども、とりあえず片付けなければならないのは左翼、日本人のほうです。結局、この問題って在日特権じゃなくすのはどうしたらいいかと思ったら、日本人がなくなると決めるしかないわけです。そこで政治的な勢力、市民運動としての勢力を持っているのが左翼なわけですから。だからそこに対決していくというのは、1つの大きな路線だと思いますね。在日朝鮮人って確かにそういう形で対立みたいな構造はありますけれども、在日朝鮮人自体がそんなに我々とそんなに対立するようなものでもないです。彼らは彼らなりに悩んでいるところがありますのでね。そうやってみると、本当の敵というか今すぐやらなきゃならない敵は、日本人の左翼のほうだと。

ただやっぱり我々もね、将来的にどこと戦わなければならないのか、というのは頭の中には入ってますよ。我々別に左翼を拒んでいるわけでもないですよ。たまたま左翼と在日問題ということでフィルターかけちゃうと対立するんです。左翼と戦わなければならないけれども、我々戦争したいのは、戦わなければならないと思うのは北朝鮮であり、韓国であり、もうちょっと先にはシナっていうのがあつたわけですけど。でも、本当に戦わなければならないのはアメリカですよ。もう1回戦争しなければならないと思ってます。

《社会統制》

確かにそういう側面(公安が気になる)はありますね。だけど、一応その我々は今のところ公安に対して敵対しているわけでもないですし、彼らの嫌い——警察にとって嫌いな組織に対して我々は攻撃しているんだから。ただやっぱりそうはいいってもね、完全に味方だとは思ってませんよ。彼らは彼らの仕事でやっていると、こっちはこっちでたまたま利害関係が一致し

ていれば、ちょっと協力お願いしますと。今日のカウンターとあって、基本的に彼らが通ってくるルートってあまり許可が出るような、集会とか街宣の許可が出るようなところじゃないんですよ。そこを通行の邪魔にならないという通行の一角を設けてくれて、その中でやる分にはいいよ、その代わり出たら保障しないよということになりますけど。そういうことになりませんで、私はそんなに公安、あるいは最近公安調査庁ともいろいろインタビューとか、こっちが情報提供してあげてますしね。

左翼担当は目つきでわかりますもの。それが一番よくわかるのは、一般参賀、皇居の時に公安で右翼担当と左翼担当が出てくるわけですよ。公安の人はだいたいバッジで分かるわけですけども、右翼担当の人たちっていうのは何か目つきがだらけてますよね。左翼担当の人はものすごい目つき悪いていうか、厳しい目つきしてますよね。見てすぐにわかりますよね。時々その警察なんか我々申請しに行くじゃないですか。で、土曜日とかに受け取りとか何かかっていうと、担当の人、宿直とかなかにかそういう形で、その場に残っている人しかいないですよ。時々刑事課の一番ガラの悪い人間が受付にいる時があるんですよ。そのときはすぐにわかりますよね。暴力団かと思うような人間がそこに座っているわけですから。だから、我々ね、どちらかという公安の三課なんで、あんまり怖い人とか目つき悪い人たちは出てこない、あまり表立って出てこないし、そういう人たちはむしろビデオとっているとか、ちょっと遠く離れてます。機動隊の対応をみてもそうですよね。こちら側に対してはちょっと甘いですよ。

デモ行進の指揮というのですか、デモ行進に出にくい人を引っ張り込むという点ではチャンネル桜はよくやっていると思いますよ。今までデモに出てこなかった人がデモ行進に出てもいいんだよ、当たり前前思っていたことを表現してもいいんだよ、在特会ほど過激なことはいわない。そういう形でね、私は在特会と違いますよ、こういう過激な人たちとは違いますよという路線を示せた、ああいうことをやってくれたのは1つありがたいと思いますよね。

8. 活動の果実

《右にいく土壌》

（右に寄る）土壌というのはあったと思いますよ。我々の信仰っていうんですかね、神社、あるいは仏教というところも日本流にアレンジされたものだともともとあって、子どもの頃からお葬式だとかあるいは正月なんかにしても、昔からの習慣をやっていると。

で、それが何か知らないけど教育で大分歪められますけれども、やっぱりその習慣というのはなかなか消え去るものじゃなくて。それがぼっと拉致という問題とか入ってきて、国家主権とは何かと考えると、やっぱり実は右翼の人たちがずっと言ってきたことは間違っていないと。何となくその怖いイメージだとかいうので言われるけれども、実際に会ってみると別にそんなに怖い人たちでもないし、我々とそんなに変わらないと思えるわけです。

そういう眼でみると、左翼の人たちがあまりにも異常に見えてくるんですよ。合理的にあって、正しければいいんですけど、どっかしら矛盾を抱えちゃっているわけで。そういうのに段々気がついてくると、やっぱり2000年以上の伝統とかを持っていて、そのまんまでいいんですよ、という右翼の流れというんですかね、それが自然と「ああなるほどな」と思える。もともとの自分が生まれ育ってきて、これが当たり前だと思ってきたことはやっぱり当たり前だった、それくらいですよ。

《得られたもの》

やってよかったというのは、私自身はかなり個人主義になっちゃいますけども、会社でマネジメントとかっていうのをこれからやっていかなければならない。今もやらなければならない立場なんですけども、その段階で会社では教えてもらえないそういうことを直に自分がやらなきゃならなくて、いろいろ成功失敗ありますよね。そのなかで学ぶことができた、これはかなりよかったと思いますよ。

それとあとやっぱり、運動もそうだし会社でもそうですし、何をやらなければならないのかなというのが割とすぐに答え出せるようになったというところですよ。やっぱり会社にいってずっとやっていたら、ここまで知ることできなかつたなと思いますし。会社でああやれこうやれといわれると、これはおかしいだろうとすぐにわかるんです。おかしいんだけどこれはやらなきゃならないのかな、とかいろいろやり方はありますけど、それがわかってきた。それはもう在特会の成功失敗というところでいろいろ経験してきた、大きな財産になりましたね。

国民運動とか運動論とかっていうと、ちょっと最近インターネットで答えが出てますけれども、何が大切かというトップの目立つというそこも重要なんですけれども、そこにいるナンバー2とかナンバー3がいかにしてこれを伝播させるか、そこに集約されているんじゃないか。で、なるほどなと思いましたね。今の在特会の組織を見ますと、とにかく支えている体

制があるということです。で、会長の、一般からしてみれば常識はずれなことをぼんとやると。それをいかにして面白く伝えるかというのがね、うまく広報とか使ってね。それに尽きるなと思いますよ。

私としてはそんなに特別なことをやっているわけではないですけども、それは普通にできる。その上で、普通に社会人やってたらどうにも得られなかったものを得られるようになった。交友関係もできましたしね。そういうのは大きかったですね。在特会をやっているということで、普通にやっていたら得られないような人脈、日本会議にしてもそうですし、そういうのもやっぱりありましたから。普通にしゃべれないような相手としゃべれるとか。

9. 結語に代えて

F氏に関して興味深いのは、「ワールドカップ」と「拉致」の双方が影響を与えた点である。ワールドカップは、「嫌韓」感情を抱ききっかけとなり、拉致問題は運動を始める端緒となった。しかしF氏の場合、単なる排外主義にはとどまらず、維新政党・新風入党したり、西村真悟に師事したりするところまで至っている。その意味で、体系的に極右的な思考を身につけて政治的に生まれ変わったといってもよい。

筆者にとって、ワールドカップ、拉致、在日コリアンを結びつけるのが、「同じ民族ですから」という本質主義的な民族観であることも興味深かった。仮に三者をエスニシティで結びつける研究者がいたら、エスニシティ研究者として失格といつてよいくらい、現代の研究水準からすれば非科学的な議論である。しかし、政治体制や包摂様式の差を乗り越えて「民族」の本質が保たれるという観点に立てば、韓国・北朝鮮で何か生じるたびに「在日」が標的となる構造が維持される。これは、冷戦と植民地清算が影響しているという筆者の仮説より、さらに朝鮮半島と在日コリアンを同一視しうる見方である。在特会の他のメンバーは、ここまで本質主義的な見方を示したわけではないが、現実の運動に際して本質主義的な排外主義へと変化する可能性もあるのではないかと。

さらに、運動論として興味深かったのは、「相手の痛いところをついていけば」在特会に対する支持は増えるという分析である。これは、別稿で示したようにカルデロン・デモについては該当しており、その後に会員数が伸びるようになった。しかし、京都の朝鮮学校襲撃事件では、一時的に注目され入会者も増えたものの、それ以降組織が伸び悩むきっかけとなった。維新政党・新風やチャンネル桜など、関連団体から在特会の「過激さ」が非難されるようになり、それ以外の

の団体とトップ同士の関係悪化といった状況が重なり、在特会自体は孤立の度合いを深めている。「相手の痛いところをつく」ことの効果は、攪乱性を高めて注目を集める一方で、それが「行き過ぎ」と組織の孤立と支持者離れにつながるのではないかと。タローがいう抗議サイクル論によると、初期のうちは攪乱性が高い行為が効果的であるが、末期になると攪乱性の追求が暴力に行き着いて支持を失う (Tarrow 1989)。在特会が逮捕者を出して支持者離れを引き起こしたのは、いわば自滅といつてもよい失策であるが、そうした集団は少数精鋭で過激化する傾向がある (della Porta 1995)。在特会が「思想」教育を打ち出したのは、少数精鋭の集団として再編する路線の模索ともいえるわけで、それを先取りするのが F 氏の活動歴なのかもしれない。

文献

della Porta, D., 1995, *Social Movements, Political Violence, and the State: A Comparative Analysis of Italy and Germany*, Cambridge: Cambridge University Press.

樋口直人, 2011, 「東アジア地政学と外国人参政権——日本版デニズンシップをめぐるアポリア」『社会志林』57(4): 55-75.

上丸洋一, 2011, 『「諸君！」と「正論」の研究——保守言論はどう変容してきたか』岩波書店.

Tarrow, S., 1989, *Democracy and Disorder: Protest and Politics in Italy, 1965-1975*, Oxford: Clarendon Press.

(付記)本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。